
オタクさんの転生事情

ハド爺さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタクさんの転生事情

【Nコード】

N0149Y

【作者名】

ハド爺さん

【あらすじ】

色々な人が残念な転生をします。

プロローグ

子供の頃、世界は夢であふれていた。

どんな事もでき、何にでもなれると本気で信じていた。

大人になるにつれて、それが根拠の無い幻想だとわかっていても認める事はできなかった。

だから、ゲームやアニメといったサブカルチャーに傾倒していったのも当然といえる。

あの中は夢で溢れている。

今ではオタクの聖地とも言える電気街に新作を漁りにくる毎日。

この街では「いい年した大人が何をしているんだ」といった差別的な目で見られる事はない。

同じ趣味の仲間が集う街。そこでは良識ある大人は逆に少数派だ。

未来の展望どころか現状の把握すら放棄し、偽造の夢にひたること
で自分を保とうとする人々にあふれている。

そんな居心地の良い街の空気に触れながら、日課の本屋巡りを終えて、ふと暗くなり始めた空を見上げると・・・そこには太陽が二つあった・・・

・・・20××年 7月×日

謎の隕石落下により1つの街が消滅し、死傷者・行方不明者合わせて1万人を超えた。

・・・

そこは見渡す限り黒い部屋だった。

不思議と明かりが無いのに天井や壁がはっきり見える。

自分の体は無いらしく、意識と周りの状況だけがわかるようだ。
体が無い事から、死んだのだろうか、何の感情もわからない。

これが、生前の性格によるものか、この空間のせいなのかは、わからない。

不思議と心が落ち着いていた。

その時、どこからか声が聞こえた。

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言って下さい』

最強の転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言って下さい』

この言葉を聞いた時、今まで穏やかだった俺の心が一瞬で最高潮にまで湧き上がった。

よく、人生は誰もが主人公だと言うが、あれは嘘だ。

もし、そうだとしても俺の人生は酷くつまらない物語だ。

一般家庭に生まれ、普通の幼少時代を過ごし、悩むことなく近場の三流大学へ、そこを卒業したら地元で就職し、定時に帰ってゲームをする日々。

三十路を過ぎたあたりから、結婚をあきらめ現実逃避に没頭する毎日。

休日は、トイレと食事以外はパソコンの前から動かない。

いつ死んでも良いが、死にたくはなく、誰かが日常を変えてくれる事を妄想して気を紛らわせる。

こんな物語、誰が喜ぶというんだ。

しかし、今は違うやつと選ばれたのだ。

俺が主人公だ。

よくある小説のように、最強の力を手に入れ世界で名を馳せてやる。

気分が高揚して、いてもたってもいられなくなった俺は気付くと勢いにまかせて叫んでいた。

[illegible]

結論から言うと、俺は間違いないで世界最強だろう。

刃物も通さない硬質化した皮膚

睨むだけで人を殺せる眼力

軽く動かすだけで竜巻を起こせる翼

そう、俺は最強のドラゴンに憑依したようだ。

人間でない事に愕然としたが、まあそこは良い。

5

封印中だった。

がんばって見たが指一本動かせない。

どうも生来の破壊衝動から暴れていたドラゴンを、国を挙げて討伐しようとしたようだ。

しかし、どうしても倒すことができずに封印する事で精一杯だったらしい。

はあ、あと何年封印されてなきゃいかんのだろう
これこそ、つまらない物語だ・・・

世の理（ことわり）を知る転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言って下さい』

この言葉を聞いた時、僕は今まで以上の混乱におちいった。

僕は、そこそこ頭の良いほうだと思う。

なぜなら、僕が世界にとって無価値で無意味な存在だと判っているからだ。

人間は人生に意味を持たせたがる。

自分の存在は特別だと盲信して、価値を求めて生きている。

この世界から見たら、どんな生物にも価値なんてないのに。

自分を無価値だと認めながら、心を殺して生きていくしかないんだから。

だからこそ、この提案には驚いた。

転生させてもらえるのは良い。

輪廻とか、そういうシステムで世界はできているのだろうし。

でも、なぜ希望を聞くんだろう。

何も言わずルーチンワークのように転生させれば良いじゃないか。

「君は特別です」とでも言うんだろうか。

そもそも、この声の主は何者だ。神様なのか。

わからない。わかるはずがない。

僕は凡才なんだ。僕程度の頭で理解できるはずがない。

だけど、知りたい。なぜか好奇心が抑えられない。

気付けば僕は願っていたんだ。

「あなたと同じ知識をください」

|||||
|||||

ともすれば音が聞こえてくるような知識の濁流に

僕の自我は吹き飛ばされた。

粉々に散っていく意識の中で、答えを得た充足感だけが残っていた。

・・・は転生した。全ての自我、欲求を知識で押し流されて。
赤ん坊ながらにして世界の理^{ことわり}を知り、個を無くした物として。

残念な転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言ってお下さい』

この言葉を聞いた時、自分は不覚にも軽く失禁してしまいました。こっ、これはテンプレートな転生フラグではありませんか。

物心ついた時から漫画やアニメにドップリ浸かり、クラスメートの名前は覚えて無くても、好きな漫画の登場人物はモブキャラですらフルネームで言える自分としては、垂涎ものの展開であります。

まあ、垂らしたのは涎ではありませんでしたが、それは些細な事、^{びくびく}冷静にであります。

このような展開に慣れている自分としては、現在の状況確認が急務であります。

まず、この死亡が誰のせいかで今後の対応を決めねばなりません。

よくある「神様のミス」で死んだ場合は、強気にいき情報を引き出し、転生時の特典を増やしてもらうのが定石なのです。

しかし、先ほどの声は『あなた達』と言っておりました。さすがに、ミスで複数の人間を殺害というのは、自分の知識を持っても記憶に無いパターン。

となると、「神様の娯楽」のために転生させられるという状況が有力ですが、この場合は他の転生者の有無で対応を変えねばなりません。

今回は、他の転生者がいるので、良くある『最強の力』や『無限の魔力』という願いは神様も辟易しているはずですから避けます。ベストな願いは神様に『そんな力で良いの?』と言わせつつ、使い勝手の良いものです。

それを決めるのには、転生先の情報が重要になってきます。まずは、神との交渉と洒落こみましようか。

・・・あのー・・・

あれ、声がでません。

ああ、体が無いので当然ですか。

それなら、どうやって願いを伝えるのでしょうか。
例えばテンプレ通りに心を読んで・・・

・・・って、心読まれてんじゃね

心の声、駄々漏れじゃね。

都合よく願いだけ聞こえますってわけなし、今まで考えてた事、意味無いじゃん。

うわぁー、初歩的なミスかましたわぁ。ないわぁ。

はぁ、もうどうでもよくなりました。

情報を教えてくれって頼みが、願いだと判断されても困るので、さっさと願いを決めてしましましょう。

昔の漫画の主人公で、板であれば、どんな板でも作り出す事ができる能力

【無限の板製（UNLIMITED PLATE WORKS）】
これを使えるようにしてもらいましょうか。

転生物で、もっとも良く使われる能力だが、それだけに使い方が検討されつくしていますし。

木の板で家を作ったり、金の板を売って金にしたり、オリハルコンやミスリルといった空想素材で強力な武器を作ったりと汎用性もあります。

もちろん板を作る能力なので、目の前に壁を作って防御もできるし、薄くした板を飛ばして相手を切り裂いたりもでき戦闘にも便利。

まあ、他の転生者と同じ願いをするでしょうが、培った知識で自分の方がうまく能力を使えるはずですし。

・・・ふう

当初の予定とは、大分離れてしまいましたが、この能力なら転生先で苦労する事は無いでしょう。

あとは、転生者という事を隠して、面白おかしく生きてみましょうかねえ。

では、

「無限の板製（UNLIMITED PLATE WORKS）を使えるようにして下さい」

残念な転生者たち

俺が神に

「無限の板製（UNLIMITED PLATE WORKS）を
使えるようにして下さい」
と願ってから5年がたった。

俺は早々に言葉を覚え、知識を集めまくった。

まあ、5歳児が出来る事など高が知れているが、それでも大体の事は理解できた。

まず、この世界は一般的な転生物のように、剣と魔法の世界のようだ。

大体10〜20世帯で集落を作り、農業や狩りをして生活する中世ヨーロッパのような文明レベルだ。

集落の外には、危険な動物も多くいるようだが、街道から外れないかぎりには、そう襲われる事もなく平和な世界らしい。

国も相互補助の関係が強く、危険な動物から身を守るための組織と
いった役割に過ぎず、そういう理由から集落同士の小競り合いはあ
っても、国家間の戦争といったものは、あまり無いようだ。

食文化も進んでいて、マヨネーズやケチャップといった物まであつた。

最初は、危険な世界でないかと心配していたが、それは杞憂だった。
世界は平和で、とても過ごしやすかった。

だからこそ理解した。
俺が考えていたより、神は残酷だったと・・・

この世界に義務教育といったものは無く、俺くらいの年で家の手伝いを始めるのが普通だ。
家は鍛冶屋をしており、俺はその跡取り息子として仕事を手伝っている。

そのため、鍛冶屋にある道具はいつでも使える。

そう、『UNLIMITED PLATE WORKS』という名の鍛冶屋を使えるのだ。

この現実を理解した時、俺は愕然とした。
最初、あまりに色々と考えてたから神に嫌われたのかと思ったが、それは違っていた。

なぜなら、町には「殿の財宝」や「バンジージャム」といった漫画の必殺技や能力の名前をした店が多くあったからだ。

『UNLIMITED PLATE WORKS』という名前の店にいたっては、武器屋だったり酒場だったり5件以上ある始末。

また、「シロウ」や「クロロ」と言った漫画のキャラと同じ名前の奴が、ゴロゴロしている。

たぶん、「○○になりたい」といった願いをしたのだろう。

極めつけは、今俺が住んでいる集落は200世帯程の大きな街なのだが、名を『ネジマ』という。

『ネジマ』とは、前世で流行っていた漫画の題名だ。

5年前まではポルラという名前の街だったらしいので、誰かが

「ネジマの世界に転生したい」

と頼んだのだろう。

どうやら、神は俺達にまったく興味が無いようだ。なんといっても願いの叶え方が雑すぎる。

もし、神の娯楽のために転生させたのなら、この世界に影響を与える能力でなければ意味が無いはずだ。

俺のように、普通の鍛冶屋の息子として生まれても、世界は何も変わらないだろう。

もちろん、能力が使えないというだけで諦めたわけではない。

子供の頃から、剣や魔法の練習をすれば、かなり強くなれるのではと考え、剣の練習をした事もある。

まあ、普通に努力できるなら、前世でも苦労はしてないという事だ。子供の頃からやろうと、大人になってからやろうと、要は心の問題だ。

強くなりたいというような明確な意志が無いと、途中でどうしても

甘えがはいる。

なまじ、この世界が平和なため、何事にもやる気がでないのだ。だって、斬られたら痛いんだよ。ちよつと練習用の剣で、指を切ったが脂汗がでるくらい痛かった。

こんな痛いおもいをしなくても、俺は鍛冶屋を継げば食べていける。剣の練習は1ヶ月くらいで止めてしまった。

魔法は、使えないわけでは無いが、才能が無いため日常的に使うだけで精一杯だ。

他にも俺が転生者である事は、街中に宣伝しているような状態のため、転生者同士で協力しようという提案を受けたこともある。

だが、名前がアニメキャラなだけの一般人が何人集まった所で、なにもできない事がわかった。

小説では定番の、元の世界の知識を活用しようにも、パソコンの使い方や車の運転の仕方くらいしか身についている知識はなく、農業などに至っては機械に頼った考えしかないため、むしろマイナススタートだ。

料理改革をしようにも、普通に食事はうまいし、作り方を知っている唯一の調味料『マヨネーズ』は既にある。

さすがに醤油は無かったが、それも作る事はできなかった。

酷い話だが、作り方が判らなかつたのではない。

一人変わった転生者が醤油の作り方を知りたいと願っていたため、醤油の作り方は判っていたのだ。

ただ、醤油を作るために必要な麹菌の作り方までは、知識を与えられていなかった。

神はどこまでも、俺達を馬鹿にしているらしい。

今では、当初の目的であった輝かしい人生計画は根底からポッキリと折られ、そのあまりの気恥ずかしさから、転生者同士であっても最低限の付き合いしかしていない。

・・・それでも俺達は、まだマシだった・・・

俺が生まれてしばらくして、世界ではある奇病が問題になった。

生まれた子供が、まったく成長しないのだ。

中には、どんな事をされても死なない子供までいた。

神に「不老不死」を願ったのだろう。

かなりの転生者が、この願いを言ったらしく患者の数は、五百人とも千人とも言われている。

俺達の街でも、3人いたらしい。

俺が言葉を覚えて、この事を知った頃には、既に王都の収容施設につれて行かれた後だった。

原因不明の奇病のため赤ん坊を、その家族ごと隔離しているという噂だ。

何をされてもけして死ねない彼らは、検査と称した実験を永遠に受ける事だろう。

神は何のために俺達を転生させたのだろうか・・・
今ならそれを願うというのに・・・

裕福な転生者

『あなた達を転生させますので、一つだけ希望を言って下さい』

この声を聞いて、私は少し落ち着く事ができた。

この真っ黒な部屋には、私以外は誰もいないようで、さつきから、色々と呼びかけていたが、何の反応もなかったのだ。

それが、やっと声が聞こえてきたのだから、その事に安心したとしても、仕方無いと思う。

・・・あのーここはどこですか・・・

今までとは、違い声のした方へ問いかけてみる。

・・・私は死んでしまったのでしょうか・・・

・・・一緒にいたはずの紗代ちゃんは、どうしたんでしょう・・・

・・・あのー・・・

まったく反応がない。

あまりの寂しさに、幻聴を聞いてしまったのだろうか。

実際、私が死んでるって事は判っているんだ。

だって、紗代ちゃんに連れられていった電気街で、爆発に巻き込まれた記憶がはっきりあるのだから。

熱くて、息苦しくて、一秒でも早く楽になりたかった強烈な記憶。

あの状態では、助かるわけがない。
現に、今の私には体が無いじゃない。

死を自覚したとたん、急に悲しさがこみ上げてきた。

・・・死んじゃったのかぁ・・・

・・・お父さんとお母さん泣いてるかなぁ・・・

・・・マー君に電気鼠を描いてあげる約束してたのになぁ・・・

もう会えないであろう家族の顔を思い出し、泣きそうになるが涙が
でる事はなかった。

・・・体、無いもんね・・・

いつか見たテレビで、泣く事は最大のストレス解消法と言っていた
が、その通りだ。

泣けない事が、こんなにつらいと思わなかった。

悲しくて悲しくて、今まで楽しかった事や辛かった事が走馬灯のよ
うに頭に浮かんでくる。

お父さんは優しくかったけど、不器用だったから出世できずにヘトヘ
トになるまで働いてくれた。

お母さんは、いつも笑顔で美味しいご飯を作ってくれたけど、金銭
感覚が無かったな。

よく、アパートなのに高枝切りバサミを買ったり、純金の印鑑買っ
たりしてたな。

冷静に考えると家は、かなり貧乏だったと思う。
私も新聞配達などで、生活費を入れていたほどに。

だって、お母さんが使うんだもん。

20万の高級羽毛布団って何よ。しかも家族4人分。

「だって、今年の冬は寒いつていうからあ。」
って毎年、寒いよ。

お父さんは、いつも苦笑いで許しちゃうし、マー君も幼稚園児だから止めやしない。
一時期、家に帰るたびに物が増えているので、抗議の家出をした事もあったなあ。

マー君もマー君だ、誕生日プレゼントの電気鼠の絵だって

「お姉ちゃんの絵が良いな。既製品は味気なくて駄目だからね。」
凄い気の使いようだよ。

君は幼稚園児なんだよ。もっと我慢いいんだよ。

・・・その絵すら渡せなくなったけどさあ・・・

なんか、お母さんの愚痴を言ったら落ち着いちゃったな。
まあ、貧しくも楽しい我が家だった。

「ただ今度は、お金に困らない生活がしたいかな。」

[illegible]

自分が願いを言った自覚もないまま、転生して5年がたった。

今日は私、シルビアⅡエクスⅡボードローグの誕生日だ。

「確かに、お金には困らないわよねえ。」

私は、オーダーメイドの可愛いドレスをメイドのお姉ちゃん達に着せられ、執事のチャバス爺ちゃんに手を引かれて会場に向かっている。

お父様と、お母様は厳しくもやさしいし、屋敷に勤めている人たちは、私を実の娘や孫のように育ててくれる。

「文句を言ったら罰があたるよね。」

「どうかされましたか？」

私の独り言が聞こえたのか、チャバス爺ちゃんが態々立ち止まって、しゃがんでくれた。

「パーティって初めてだから、緊張して・・・」

まるで微笑ましいものを見るように、チャバス爺ちゃん是我的手を包み込むと

「大丈夫です。今日は、皆さんお会いした事のある方ばかりですよ。」

「それに、お嬢様は聡明でいらっしゃる。どんなパーティに出ても恥ずかしくありませんよ。」

そう言うてにっこり笑うと、ゆっくりと私を促してくれた。

（本当に満たされてるなあ・・・）

そうこうしてる内に、目の前に大きな扉が見えてくる。

係りの人が私達を見て、笑顔で扉を開けてくれた。

（だけど・・・）

穏やかな談笑に包まれる広い会場に、一際大きな声が響いた。

「シルビア姫。御到着されました。」

（王族は、やりすぎだよお）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0149y/>

オタクさんの転生事情

2011年11月4日11時13分発行